

2025(令和7)年度 第3回 サロン・ド・大学コンソーシアム大阪
大学 DX を実質化するために現場の大学職員ができること
開催報告

日 時: 2026(令和8)年1月9日(金)18:00~20:00
会 場: キャンパスポート大阪(大阪市北区梅田1-2-2-400 大阪駅前第2ビル4階)
講 師: 寺尾 健志氏(寺尾コンサルティング/東北大学 特任准教授(客員))
司 会 進 行: 松田 優一氏(大学コンソーシアム大阪 研修部会推進委員会 委員/
関西大学 学事局 学部・大学院事務グループ 理工系事務チーム 主任)
参 加 者 数: 17 大学 24 名(うち会員外2大学2名)
実 施 結 果: 大学コンソーシアム大阪 HP の「参加者アンケート」参照
企 画・運 営: 大学コンソーシアム大阪 研修部会推進委員会

1. 開催概要

大学業務におけるデジタルトランスフォーメーション(DX)は、多くの組織で喫緊の課題として認識されつつも、その推進には様々な障壁が存在する。本サロンでは、大学関係者が日頃感じている「なぜうちの組織はDXが進まないのか?」という疑問に対し、大学という組織が持つ固有の特性を踏まえながら、DXの本質、現状の課題、そしてこの停滞状況の中で大学職員は何ができるのかについて、多角的に考察し、共に考える機会を提供する。



司会: 松田委員

2. 開会挨拶(中村副委員長)

大学という保守的な組織の中で、変革のマインドや組織文化をどう作っていくかは非常に重要であり、そこが明確になればDXも進むのではないかと考えている。世の中で「DX」という言葉が独り歩きするなか、それが本当の意味で「トランスフォーメーション」と言えるのか、我々も自問自答しなければならないだろう。本日は正解を求めるのではなく、DXについて改めて考えるためのヒントをいただけると期待している。



開会挨拶: 中村副委員長

3. 講義概要

<DXと現在地>



講師: 寺尾 健志氏

「DX」は単なる業務プロセスの改善(デジタル化)ではなく、組織、企業文化、風土をも改革する「デジタルを利用した変革(トランスフォーメーション)」を指す。現在、生成AI(LLM)は月・週単位でアップデートされており、身近で汎用的なツールとして我々の日常生活に浸透してきている。それはいまや「生成AI=ChatGPT」というかつての認識を脱し、より高度で多様な活用フェーズに移行したといえる。また、その活用範囲はテキストのみにとどまらず、画像・映像、音声、各種データファイルまでを統合的に扱う「マルチモーダル化」が進んでいる。従来はコストをかけて整えた「構造化データ」しか扱えなかったが、AIの登場により、日々のメモや音声等の「非構造化データ」も直接業務に活用できるようになった。

<なぜDXが進まないのか>

DXが停滞する真因は、予算や体制の欠如といった形式的な問題ではなく、組織風土や文化そのものの変革が進まないことにある。特に大学特有の「部局のサイロ化」は、単なるDXの阻害要因にとどまらず、全体最適を阻む本質的な組織運営上の課題といえよう。また、小さな成功(スモールウィン)を積み重ねて文化を定着させる「チェンジ・マネジメント」のプロセスが、多くの現場で軽視されているとも感じている。なお、組織がサイロ化すればデータも分断され、AI活用に不可欠な「全学的なデータ利用」は困難となる。DXの実質化には、データやその背景情報(データ・ディスクリプション)を、部局を越えて共有できる仕組みの構築が不可欠である。

<現場の大学職員は何ができるのか>

心理的安全性が高いチームほど、統計的にパフォーマンスが高く、新しいアイデアが生まれやすい。DXに必要な「エクストリームな発想」が生まれるためにも、心理的安全性の高い環境醸成と、変革のためのトレーニングが必要だ。デジタルツールを導入するだけでは「デジタルライゼーション(Digitalization)止

まり」となってしまう。ツールを導入して“どうなりたいのか”を再定義しておくことも大切だ。「DXの土壌づくり」として、“真正面から”組織改革に取り組むことが、DXを進める一番の近道であると考えている。また、ツールを活用し、仕事の進め方を自律的に変えていくなど、個人としてできるアプローチがあることも意識してほしい。

4. 質疑応答

質問1: 学内においてDX推進者と傍観者に分断されがちな状況を打破するヒントがあればご教示いただきたい。

回答1: 傍観者のなかにも潜在的な推進者が存在する場合もある。組織内の推進者である立場の方が心理的安全性を担保したうえで課題を共有し、コミュニケーションをとることが有効ではないだろうか。

質問2: 推進する側が積極的な情報発信を行っている大学もあるが、学内外に対する情報発信は必要だろうか。

回答2: 人材採用等の観点からも、発信は有効であろう。また、積極的な情報発信を行っている大学には学内にキーマンがいることが多い。そのような内外の「顔」となる人材がいること自体がポジティブな効果を生むこともあると考えている。

質問3: DX推進に向けて、外部の方にどこまで関わってもらわなければならないか。

回答3: 外部の方に関わってもらえる場合は、ほかの教職員からみて「丸投げ」に見えないようにすべきであろう。信頼関係を結んだうえで、単なる発注先ではなく「外部から支えてくれる人材」としての関係性を構築することをすすめる。

質問4: 研修で行うべき工夫はあるか。

回答4: まずはデジタルよりもトランスフォーメーション(変革)のほうをきちんと伝えることをすすめる。

5. 閉会挨拶(竹中委員長)

本日の研修を経て、DXを自己目的化せず、「何のために使うのか」という目的意識を組織で共有することが重要と改めて実感した。かつてのIT導入と同様に、ツールを導入するだけで解決するわけではなく、関心を持つコアメンバーを起点にスモールスタートを切り、成功事例を積み上げていくことが重要である。全体最適を見据えながら、各職場での実践へとつながっていくことを期待している。



閉会挨拶: 竹中委員長

6. 情報交換会

本編の終了後には、参加者と講師による情報交換会が開催され、大学を越えたネットワーキングが図られた。



会場の様子



情報交換会の様子

7. 参加者アンケート結果

「参加者アンケート」に掲載

以上